



ポーランド北部からオンにかけてのソ連軍の軍決死の抵抗！

オストプロイ

★ソ連軍、ヴィッスラ河を越えて大攻勢を開始！

「これはジンギスカン以来、最大のこけおどしだ」——1994年末、ギーセンの総統大本營で迫り来るソ連軍大攻勢の予測についてのグデーリアン陸軍参謀総長の報告を否定してヒトラーが述べたこの言葉は、1945年1月12～15日にかけてバルト海からカルパチア山脈にいたるソ連4コ方面軍が開始した一大攻勢によって覆された。

ワルシャワ市周辺からポーランド南部シュレジエン工業地帯前面の3つのソ連軍橋頭堡＝マグヌーシェフ、ブラーヴィ、サンドミールから出撃したソ連第1ベラルーシ方面軍（ジュコフ元帥）と第1ウクライナ方面軍（コーネフ元帥）は、16コ軍、4コ戦車軍、2コ飛行軍、5コ戦車軍団、2コ騎兵軍団、1コ機械化軍団の合計220万名、戦車・自走砲6460輛、航空機7472機、3万2143門の火砲・迫撃砲をもって、兵力約40万のドイツA軍集団（ハルペ上級大将）に襲いかかった。

人員で5.5倍、砲兵で7.8倍、戦車で5.7倍、航空機で17.6倍の戦力差であった。

1月12日、最初に火蓋を切ったのは、サンドミール橋頭堡から出撃したソ連第1ウクライナ方面軍だった。延長39kmの前線に第3親衛軍、第60軍、第13軍、第52軍、第5親衛軍を投入、総司令部予備の突破砲兵師団6コも集中して、前線1kmあたり240門の密度の火砲による二重弾幕射撃を実施、第1撃でドイツ第48機甲軍団の前線陣地を粉碎し、前線近くに終結していたドイツ予備兵力

に大損害を与えて急速にドイツ防禦陣に浸透した。

1944年夏～秋の激しいドイツ機甲部隊の反撃の結果、ソ連軍がヴィッスラ河畔で停止していた5ヵ月近くの間、ドイツ陸軍参謀総長のグデーリアン上級大将らは、「バグラチオン作戦」で苦杯をなめさせられたソ連流の電撃戦を阻止するため、ヴィッスラ河西岸～オーデル河畔までの300～400km間に7層にわたる強固な防禦陣地の構築を行っていた。この陣地と組み合わせて、ドイツ機甲部隊得意の機動防禦戦を実施すれば、強力なソ連戦車部隊の機動力を奪い、長期にわたる防禦戦を展開できるはずであった。

そして、1944年秋以来のヒトラーを交えた45年に向けての作戦方針を検討する会議では、繰り返しグデーリアンと前線のドイツ司令官らは、「少なくともソ連軍と接する第1防禦陣からソ連砲兵の射程外の20km以上離して機動予備兵力を配備し、そこで突破したソ連軍戦車部隊に対する本格的な迎撃戦を行なう」構想を主張した。

とくにA軍集団司令官ハルペ上級大将は、「HKL（主戦闘線＝最前線の迎撃陣地のこと）と大戦闘線（本格的な迎撃戦闘の予定陣地）とを少なくとも20km以上離し、ソ連軍の強力な準備砲撃が開始される前に後衛を残して主力部隊を大戦闘線に後退させる権限を前線司令官に与えること」を強く要請した。これは44年7月、ガリシア地方（ウクライナ北部～ポーランド東南部）で第48機甲軍団がソ連第1ウクライナ方面軍部隊をきりぎり舞いさせた優れた作戦を、一般的な戦術にしようというものだった。

ストプロイセ 猛攻とドイツ

古是三春

センの戦い

しかし、「戦闘もしないで20kmもの土地を放棄するのは何事か！」とのヒトラーの激しい拒絶のため、結局、この主張は通らず、予備兵力も最前線から3~4km以内に配置されることになった。グデーリアンは、「この過失は、1945年1月になって大きな打撃を招いた。ソ連軍は突破に成功し、しかも予備兵力が私の進言に反したヒトラーの直接命令により、第一線に近すぎたため手痛い報いをこうむってしまった」と後に述懐している。

まさにグデーリアンが悔やんだとおりに事態は進み、サンドミール地区ではソ連第1ウクライナ方面軍の攻撃第2波（第21軍、第59軍、第25・31戦車軍団、第4親衛戦車軍団など）が突破口から投入されて、順調に機動戦を展開した。

同じような事態は、ヴィッスラ河畔のより下流、ワルシャワ市周辺とマグヌシェフ、プラーヴィ両ソ連軍橋頭堡のソ連第1ベラルーシ方面軍の地区でも起こった。

1月14日、4コ突破砲兵師団の増援も得た1kmあたり240門の火砲の支援射撃を得て、マグヌシェフ橋頭堡からソ連第61軍、第8親衛軍、第5打撃軍が幅17kmにわたってドイツ第8軍団の防禦陣地に突破口をうがとうと集中攻撃を行なった。ソ連軍の突破地区では、どこでも兵力差10倍以上の優位をソ連側が保ったため、ドイツ軍による堅固な防禦戦闘など絵空事だった。

塹壕陣地を一瞬にして鋤きかえしてしまうような猛烈な奥ゆき3kmにわたるソ連砲兵の二重弹幕射撃は、ドイツ兵の機銃陣地や対戦車砲座を吹き飛ばし、生き残った少数のドイツ兵の呆然とした目の前には、地を揺るがす



グレイウィッツ市内を征くソ連第4戦車軍

「ウラー」(万歳)の叫びをあげたソ連歩兵の大群が殺到した。こうして最前線のドイツ歩兵連隊は、どれも1時間以内に消滅してしまった。

前線後方にいた予備部隊もソ連軍の猛烈な砲兵の射撃で大損害を受けており、ソ連軍主力部隊の第1撃をくい止める力はもはやなかった。

こうして、攻撃開始から1~2日めには、ソ連の両方面軍はドイツ陸軍参謀本部が苦心してつくりあげた第2防禦陣地まで、その守り手のないままの状態で突破し、果敢に反撃に出たひと握りのドイツ機甲部隊を蹴散らしながら、猛然とベルリン、ブレスラウなどのドイツ心臓部に向けて進撃を開始した。

★ソ連軍の急進にヒトラーの怒りが爆発

ソ連軍の1945年1月攻勢は、当初の予定より半月早く開始された。ソ連軍参謀本部と各方面軍司令官は、天候の悪い1月中旬までは航空機による支援が得られにくいため、突破した戦車軍団が優秀なドイツ機甲部隊に粉碎されかねないことを心配して、1月下旬に全東部戦線での大攻勢を開始することを構想し、準備を進めていた。

ジューコフ元帥ら前線指揮官たちは、前年の教訓から

表：1945年1月上旬におけるドイツ・ソ連の戦力比較

ヴィッスラ・オーデル作戦		
	A軍集団	第1ベラルーツ、第1ウクライナ方面
兵員数	約40万名	約220万名
野砲・迫撃砲	4103門	32,143門
戦車・自走砲	1136輛	6460輛
航空機	270機	7472機
北ポーランド・オストプロセイン作戦		
	中央軍集団	第2、第3ベラルーツ方面軍
兵員数	約78万名(20万の国民突撃兵を含む)	約167万名
野砲・迫撃砲	8200門	28,360門
戦車・自走砲	700輛	3300輛
航空機	515機	3000機



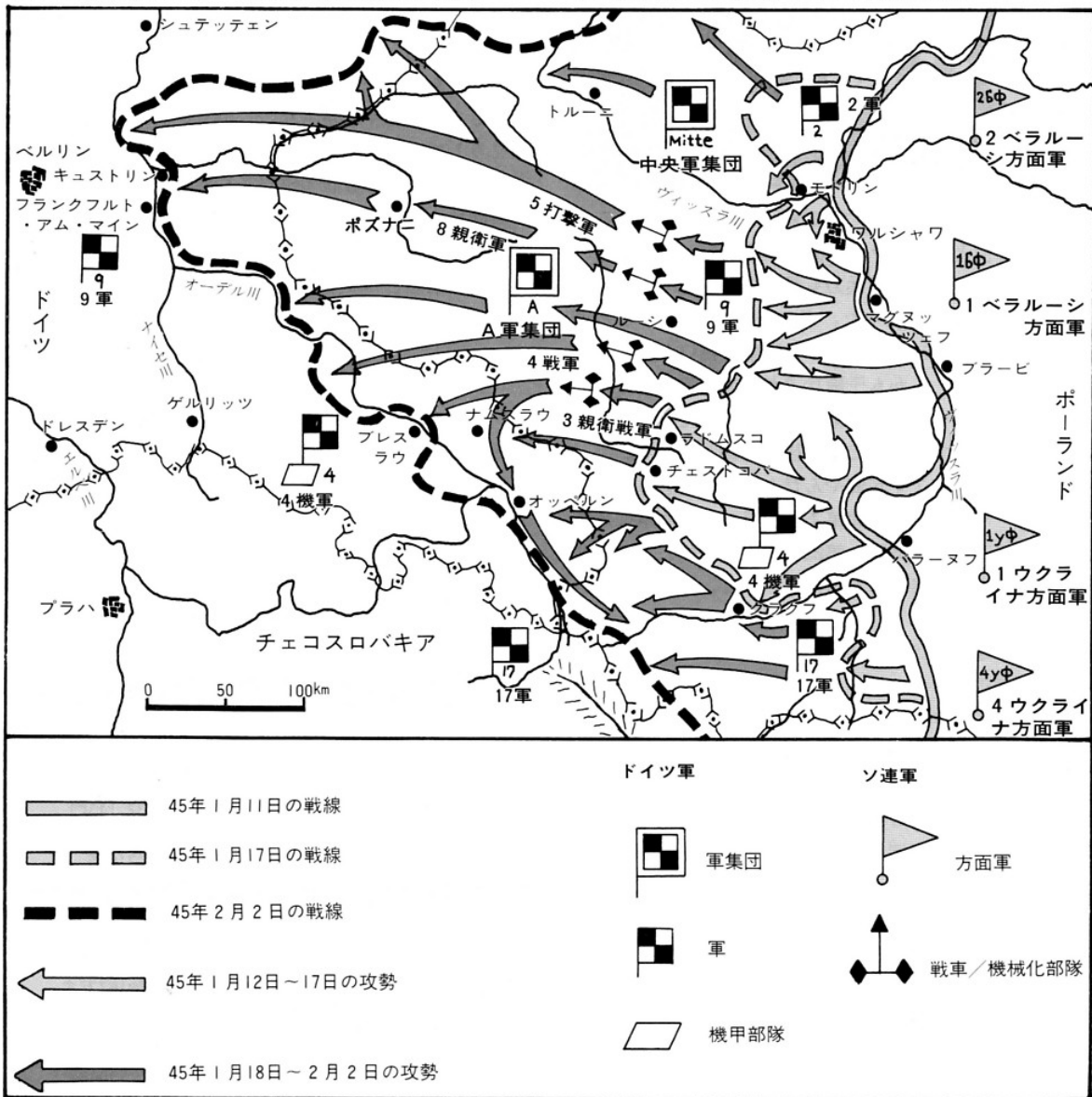
ドイツ陸軍参謀総長
グデーリアン上級大
将

砲兵の援護射撃の射程を超えて進出する戦車部隊が、ドイツ軍の巧妙な機動迎撃で打撃を受けることを恐れていた。そこで、突破機動兵力である各戦車軍団、機械化軍団にはそれぞれ方面軍空軍部隊のうちの地上襲撃機師団を1コずつ常時護衛につけることを計画していたのである。

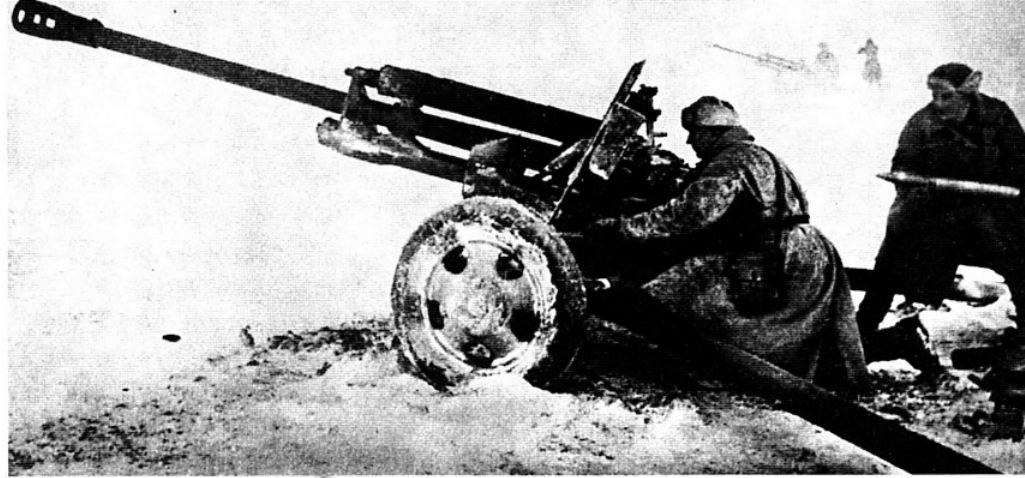
ところが、1月6日、イギリスのチャーチル首相がめざらしくもスターリン首相に対し、ドイツ軍のアルデンヌ攻勢による連合軍の苦境を脱するため、「早期のソ連軍攻勢の開始」を要請してきたのである。

有利な外交カードを得るチャンスをスターリンが無にする訳がない。赤い独裁者は、さっそく「予定されるわが軍の攻勢は、1月12日より遅れてはならぬ」と、ソ連軍参謀本部の反対を押し退けて厳命した。

ヴィッスラ河からオーデル河へのソ連軍の進撃



▶ 猛烈な二重弾幕射撃を行なうソ連軍の砲兵部隊
▼ ポーランド領内を進むソ連軍



さいわい前記のヒトラーの過失のため、航空支援がほとんど得られないまま始まった突破作戦は、ソ連司令官たちの予想以上の成功をおさめることができた。その後、1月16～17日にかけて天候が回復し、当初の計画通り空軍部隊の運用が可能となったため、ソ連軍攻撃部隊の威力は累進的に強化された。ソ連戦車隊と並行して後退速度を競うことになったドイツ軍部隊にとっては、この巨大な鋼鉄の流れをどこで止めることができるのか、もはやまったく見通しが立たなかった。

早くも攻勢開始から5日めの16日には、ヒトラーが死守を命じたワルシャワ市の全周囲にソ連軍第47軍とポーランド第1軍が迫り、いまやドイツの戦争経済にとって

死活的な役割を果たしているシュレージェン工業地帯の主要都市のひとつ、クラクフ市にソ連第1ウクライナ方面軍第59・60軍と、第4ウクライナ方面軍第38軍が肉薄していた。

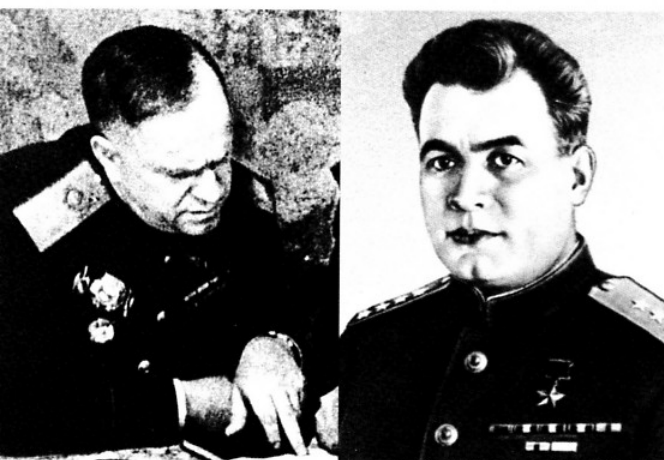
混乱の中でサンドミール西方20kmの強化要塞都市ケルツェ周辺では、智将ネーリング大将に率いられたドイツ第24機甲軍団が伝統的な優れた技量を発揮して、ソ連のパットン＝ルィバルコ中将の第3親衛戦車軍を向こうにまわしてわたりあったが、もはや制空権もない下では有効な反撃をなしえず、包囲下で秩序を失わずに後退するのが精一杯という状況におちいていた。

同軍団は、さらに100kmほど北西に戦いながら後退し、オストプロイセンから列車で輸送されて投入された「大ドイツ」機甲軍団と合流し、さらにオーデル河に向かって後退していかざるを得なかった。ネーリング將軍は、「大ドイツ」の司令官でヒトラーから嫌われていたフォン・ザウケン大将とともに、包囲を最終的には突破することができた。グデーリアンはこの二人の奮闘ぶりについて賞賛を惜しまなかったが、他のドイツ軍部隊はオーデル河に至るまで組織だった戦闘を展開できずじみじめな敗走をつづけており、戦況は悪化の一途をたどった。

ソ連軍の急進とドイツ軍部隊の惨めな敗走はヒトラーの逆鱗にふれ、その「敗北主義」を理由にA軍集団司令官ハルベ上級大将は解任されて、シュルナー上級大将（前北方軍集団司令官）が後任にされた。またシュルナーも着任直後、敗北の責任を追及してドイツ第9軍司令官リュトビッツ大将を解任、ブッセ大将を任命した。

しかし、翌17日には、ヒトラーが「絶対固守」を再度厳命したワルシャワ市とその後方を守る要塞都市モドリンが、ソ連・ポーランド両軍の猛攻の前に陥落した。怒りに錯乱状態となったヒトラーは、ゲシュタポに陸軍参謀本部の作戦課将校3名を逮捕させ、グデーリアン参謀総長まで査問させる始末だった。

★戦前から強固な要塞地帯だったオストプロイセン



ソ連第1ベラルーシ方面軍司令官
ソ連第1ベラルーシ方面軍司令官
ジューコフ元帥

ソ連第3ベラルーシ方面軍司令官
ソ連第3ベラルーシ方面軍司令官
チェルニャホフスキー上級大将

ワルシャワ市～シュレージエン地区前面にわたる一大攻勢とともに、オスト（東）プロイセン地区でもソ連第2・第3ベラルーシ方面軍による攻勢作戦が展開された。

ここは、近世においては「プロイセン軍国主義の発祥地」であり、数世紀にわたりドイツ騎士団とスラブ民族との宿命の対決で重要な役割を果たした戦闘の大後方、一大出撃基地だった。第一次世界大戦時にもドイツ軍はここを起点にロシアに侵攻、帝政ロシア軍をオストプロイセンのすぐ南、ポーランド中部のタンネンベルクで打ち破り、1918年には革命ロシアの首都ペトログラード（レニングラード）を狙う攻撃を發起している。

グデーリアン、ゲーリンクもここオストプロイセンの広大な領地をもつユンカーの出身である。1930年代、ヒトラーが政権を握る以前から同地ではポーランドとソ連に対抗する防禦拠点づくりが開始され、1939年にはポー

ヴィッスラ・オーデル突破作戦参加のソ連軍の編成

第1ベラルーシ方面軍

(G. K. ジューコフ ソ連邦元帥)

第47軍

第5打撃軍

ポーランド第1軍

第8親衛軍

第3打撃軍

第69軍

第61軍

第33軍

第1親衛戦車軍

第2親衛戦車軍

方面軍直轄部隊

第11戦車軍団(第69軍戦区) 第9戦車軍団(第33

軍戦区) 第2親衛騎兵軍団(第61軍戦区) 第7

親衛騎兵軍団(第69軍戦区)

※()内は各軍団の初期配置

第16航空軍

第1ウクライナ方面軍

(I. S. コーネフ ソ連邦元帥)

第6軍

第3親衛軍

第52軍

第5親衛軍

第59軍(攻撃第2波)

第21軍

第60軍

第4戦車軍

第3親衛戦車軍

方面軍直轄部隊

第25戦車軍団(第3親衛軍戦区) 第7親衛機械化

軍団(方面軍予備) 第4親衛戦車軍団(第60軍戦

区) 第31戦車軍団(第5親衛軍戦区) 第1親衛

騎兵軍団(方面軍予備)

※()内は各軍団の初期配置と任務

第2航空軍

第4ウクライナ方面軍

(I. E. ペトロフ上級大将)

第38軍

オストプロセイン・北ポーランド 突破作戦参加のソ連軍の編成

第1沿バルト方面軍

(I. H. バクラミアン 上級大将)

第43軍(1月19日より第3ベラルーシ方面軍へ転属)

第3航空軍

第3ベラルーシ方面軍

(I. D. チェルニャホフスキー 上級大将)

第39軍

第5軍

第28軍

第2親衛軍

第11親衛軍(攻撃第2波)

第31軍

方面軍直轄部隊

第2戦車軍団(第28軍戦区) 第1戦車軍団(第39

軍戦区)

※()内は各軍団の初期配置と任務

第2ベラルーシ方面軍

(K. K. ロコソフスキー ソ連邦元帥)

第50軍

第49軍

第3軍

第48軍

第2打撃軍

第65軍

第70軍

第5親衛戦車軍

方面軍直轄部隊

第3親衛戦車軍団(方面軍予備) 第8親衛戦車軍

団(第2打撃軍戦区) 第1親衛戦車軍団(第65軍

戦区) 第8機械化軍団(第2打撃軍戦区) 第3

親衛騎兵軍団(方面軍予備)

第4航空軍

ランド侵攻の重要な出撃拠点としての役割を立派に果たした。スターリングラードでの敗北以降、再び要塞と堅固な防禦拠点づくりが開始され、44年からは加速度的に要塞地点の構築が強化されていた。

1945年の初めの時点でオストプロイセンとその西の北ポーランド地区にわたり、6つの要塞集合地区（イルメンホルスト、ハイルスベルク、レッツェン、アルレンシュタイン、ムラーブァ、トルーニ）が完成し、とくにケーニヒスベルク市前面には天然の障害＝マズル湖畔を楯にしながら3つの要塞地区が集中していた。

ソ連第3ベラルーシ方面軍前面のスダルキ～インステルブルク間の100kmの奥行き地域には、9層の要塞防禦線が構築され、同地には空軍司令官ゲーリングの私兵ともいえる精鋭ヘルマン・ゲーリング降下機甲軍団（ヘルマン・ゲーリング機甲師団と自動車化された降下猟兵師団で構成）が配置されていた。

この要塞設備のととのったオストプロイセン地区には、第3機甲軍、第4軍、第2軍からなるドイツ中央軍集団（ラインハルト上級大将）の正規兵58万名、国民突撃兵20万名の合計78万名の兵力が配置されていた。ベルリンへの最短距離としてより重要と思われるA軍集団戦区の兵力の倍近くが置かれていたのである。

対するソ連第3・第2ベラルーシ方面軍は、総兵力167万名でドイツ軍兵力の約2倍にあたるが、ワルシャワ以南の地区ほど優勢ではなかった。装備面で比較すると火砲・迫撃砲は3.4倍（2万8360門）、戦車・自走砲で4.7倍（3300輛）、航空機で5.8倍（3000機）であった。第2ベラルーシ方面軍（ロコソフスキー元帥）と第3ベラルーシ方面軍（チェルニャホフスキー上級大将）は、第1ベラルーシ・第1ウクライナの各方面軍よりも重い荷を背負うことになったのである。

★第3ベラルーシ方面軍、要塞陣地攻略に苦闘

オストプロイセン地区への攻撃の火蓋は、1月13日、ソ連第3ベラルーシ方面軍（チェルニャホフスキー大将）の第1波3コ軍をもって開始された。

同方面軍の当初の構想では、攻勢は1月半ばの天候回復を待って開始されることになっていた。まず第1波の第39軍、第5軍、第28軍が戦線1kmあたり180門程度の砲兵の弾幕射撃と第1航空軍の爆撃機師団、襲撃機師団数コと北隣の第一沿バルト方面軍所属の第3航空軍からも応援を受けた航空支援の下に、攻撃を開始するはずだった。

しかし、スターリンの厳命で期日が早められた攻撃開始日の13日は、時折はげしく降る雪と濃霧のため視界は100～200mという天候条件で、航空機の支援が不可能で



行軍中のソ連第1親衛戦車軍

あり、砲兵の攻撃準備射撃も観測による修正射撃ができず、効果がどれほどあがるか疑問であった。

その上、事実上のドイツ本土最前線として長年にわたって防備が強化された要塞地帯への攻撃である。当初の第1撃は、ワルシャワ以南の地区の攻撃に比べて相当の困難が予想された。

弱冠38歳、若き方面軍司令官チェルニャホフスキー大將は一計を案じ、攻撃の先鋒に工兵や精鋭の偵察兵を集めてドイツ軍第1陣地への短時間の砲兵射撃で探りを入れたあと、密かに潜入させた。案の定、第1陣地はソ連軍の攻撃を察知したドイツ軍が撤収したあとだった。

ソ連偵察兵たちはさらに敵陣への浸透を続け、第2陣地帯より先に布陣していたドイツ守備隊と接触、地図上の位置を有線電話で後方の砲兵隊に知らせ、敵の頭上に本格的な攻撃準備射撃の砲弾の雨を降らせることに成功した。ソ連爆撃機隊も出動し、見えない地上の敵に向けて爆撃を行ない、ソ連第5軍と第28軍主力部隊の前進が開始された。

しかし、第1撃から立ち直ったドイツ第26軍団とヘルマン・ゲーリング降下機甲軍団の兵士たちは、強固な地下壕とトーチカに依って反撃を開始。パンターやティーガー戦車をともなった逆襲を何度も行ない、この日はソ連軍に最大進出点で5～6kmの前進しか許さなかった。

グレウィッツ市内で戦闘中のソ連軍



ドイツ中央軍集団の編成

中央軍集団

(フェルディナント・シェルナー元帥)

第4機甲軍

(フリッツ・フーベルト・グレーザー大将)

第40機甲軍団

第25機甲師団 第100特殊任務部隊 師団司令部
部隊マターシュトック SS第35警察擲弾兵師団
SSディレフンガー旅団 第608師団司令部付特殊
任務部隊

第5軍団

第342歩兵師団 第72歩兵師団 第275歩兵師団
グロス・ドイッチュラント機甲軍団
第1降下機甲師団ヘルマン・ゲーリンク 第20機
甲擲弾兵師団 ブランデンブルク機甲擲弾兵師団
第21機甲師団(主力) 第615師団司令部付特殊任
務部隊

グロウガウ要塞

第16機甲師団

第17軍

(フリードリヒ・シュルツ大将)

第48機甲軍団

第10機甲擲弾兵師団 第269歩兵師団 第208歩兵
師団

ブレスラウ要塞

ブレスラウ要塞司令部 第609師団司令部特殊任
務部隊

第39機甲軍団

総統擲弾兵師団 第17機甲師団 第6国民擲弾兵
師団(一部) 第21機甲師団(一部)

第57機甲軍団

第408歩兵師団 第8機甲師団 総統護衛師団
第103機甲旅団

第17軍団

第20機甲師団 第19機甲師団 第359歩兵師団

第8軍団

第4国民擲弾兵師団 第254歩兵師団 第100猟兵
師団

ネーリンク・グループ(第24機甲軍団)

ハインリキ・グループ(第1機甲軍)

(ゴットハルト・ハインリキ上級大将)

シュレーゼン軍団集団

SS第20機甲擲弾兵師団 第168歩兵師団

第11軍団

第344歩兵師団 第97猟兵師団 第1スキー猟兵師
団 第371歩兵師団(一部) 義勇SS第18機甲擲弾
兵師団

第59軍団

第68歩兵師団 第75歩兵師団 第253歩兵師団
第544国民擲弾兵師団

第49山岳兵軍団

第4山岳兵師団 第320国民擲弾兵師団 第78突
撃師団(1部) ハンガリー第16師団(1部)
ハインリキ・グループ直轄部隊
第154機甲擲弾兵 義勇SS第18機甲擲弾兵師団
(主力)

中央軍集団直轄部隊

ユーテルボルク機甲師団 義勇SS第31機甲擲
弾兵師団 グロス・ドイッチュラント機甲軍団
の予備旅団 第601~603師団司令部付特殊任務部
隊

ドイツ北方軍集団の編成

(45年1月26日中央軍集団より改称)

北方軍集団

(ロターール・レンデュリック上級大将)

ザームラント軍支隊

(ハンス・ゴルニック大将)

第9軍団

第58歩兵師団 第93歩兵師団 第548国民擲弾兵
師団 第551国民擲弾兵師団 ピラウ要塞司令官
(第607師団司令部付特殊任務部隊) 第95歩兵師団
(残余) 第93国民擲弾兵師団

第28軍団

軍支隊直轄部隊

第1歩兵師団 第5機甲師団

第4軍

(フリードリヒ・ヴィルヘルム・ミュラー大将)

ケーニヒスベルク要塞司令官

第69歩兵師団 第367歩兵師団 第561国民擲弾兵
師団

ヘルマン・ゲーリンク降下機甲軍団

ヘルマン・ゲーリンク第2降下機甲擲弾兵師団
グロス・ドイッチュラント機甲擲弾兵師団 第50歩
兵師団 第562国民擲弾兵師団

第41機甲軍団

第56歩兵師団 第170歩兵師団 第605師団司令部
特殊任務部隊 ハウサー戦闘群

第20軍団

第558歩兵師団 第21歩兵師団 第102歩兵師団
第292歩兵師団(残余) 第120歩兵師団(残余)

第6軍団

第18機甲擲弾兵師団 第61歩兵師団 第541歩兵
師団 第131歩兵師団 第10オートバイ猟兵師団

第26軍団

第14歩兵師団 第28猟兵師団 第24機甲師団(残
余) 第229歩兵師団(残余)

第4軍直轄部隊

第129歩兵師団司令部

★ロコソフスキー軍、ムラーヴァ要塞地帯 で激闘

翌14日、ワルシャワ市北方のセロツク、ルジャンの両
橋頭堡からロコソフスキー元帥麾下第2ベラルーシ方面

軍の攻撃も開始された。第1目標は、オストプロイセン・
北ポーランド地区の防衛の要である6つの要塞地帯の1
つ、ムラーヴァ要塞である。ここも、ドイツA軍集団の
防備地区に比較して強固な防禦陣地が構築されてはいた
が、オストプロイセン本土の要塞群に比べれば十分に完



鉄道で移動するグロス・ドイッチュラント（大ドイツ）機甲軍団

成しているとはいえなかった。

それに同地に配備されたドイツ第2軍の諸軍団（第20、23、27）と要塞防衛部隊の装備と戦意は、同じ中央軍集団内の第4軍、第3機甲軍より劣っており、迫り来るソ連軍大攻勢に浮き足だつ兆候が見られていた。

ドイツ第2軍の弱点は、ソ連軍の準備砲撃ですぐに暴露された。ソ連第3、第48両軍が第1波として攻撃を開始したルジャン橋頭堡前面では、わずか15分間の攻撃準備射撃のあとソ連先鋒突撃大隊が前進すると、塹壕からドイツ兵たちが次々に逃げだした。ソ連工兵たちは、もぬけの空となったドイツ防衛施設内で悠々と、だが手早く地雷と鉄条網、対戦車障害の撤去を行ない、予定された本格的な砲兵の射撃も切り上げられ、すぐに攻撃軍主力の前進が開始された。

これより南のセロック橋頭堡では、ドイツ第27軍団の兵士たちがトーチカ陣地から激しい機銃火で攻撃するソ連第70、第65両軍の先鋒部隊に反撃した。そこで、ここでは方面軍司令部により各軍、師団から集められた特別直轄砲兵団による約1時間半にわたる猛射が加えられ、戦意旺盛なドイツ歩兵の第1線陣地は粉碎された。

防衛第1陣地のあっけない崩壊に驚いた中央軍集団司令官ラインハルト上級大将は、予備の「大ドイツ」機甲擲弾兵師団、第7機甲師団、それにケーニクスティーガー重戦車1コ大隊を第2軍に与え、反攻を命じた。激戦を戦い抜いてきたベテランを多数含み、装備もよいこれらの部隊の奮闘で、1月16日、ソ連第2ベラルーシ方面軍の前進は停止した。北方のソ連第3ベラルーシ方面軍もイルメンホルスト要塞地帯の外郭防禦陣地の要衝、グンピンネン、ラズデネン前面で苦闘を続けていた。

★ヒトラーの介入と天候の回復で局面が転換

ここでヒトラーが突如、中央軍集団とA軍集団の指揮に介入した。A軍集団司令官の交代は前に記した通りだが、中央軍集団戦区はソ連第2、第3ベラルーシ方面軍の一時的停止をもって「戦線が安定した」と決めつけ、同地域での決定的に重要な予備兵力「大ドイツ」機甲軍団のポーランド中部ロッジ要塞都市への配置転換と、ケルツェ方面での反撃への投入を命じたのだ。

同機甲軍団は、イルメンホルスト、レッツェン両要塞地帯とマズル湖畔の後方に配置され、同要塞地帯の補強と北ポーランド地区でのソ連第2ベラルーシ方面軍の突破の際にその側面を攻撃して、オストプロイセンとドイツ本土との連絡を守る役割が予定されていた。

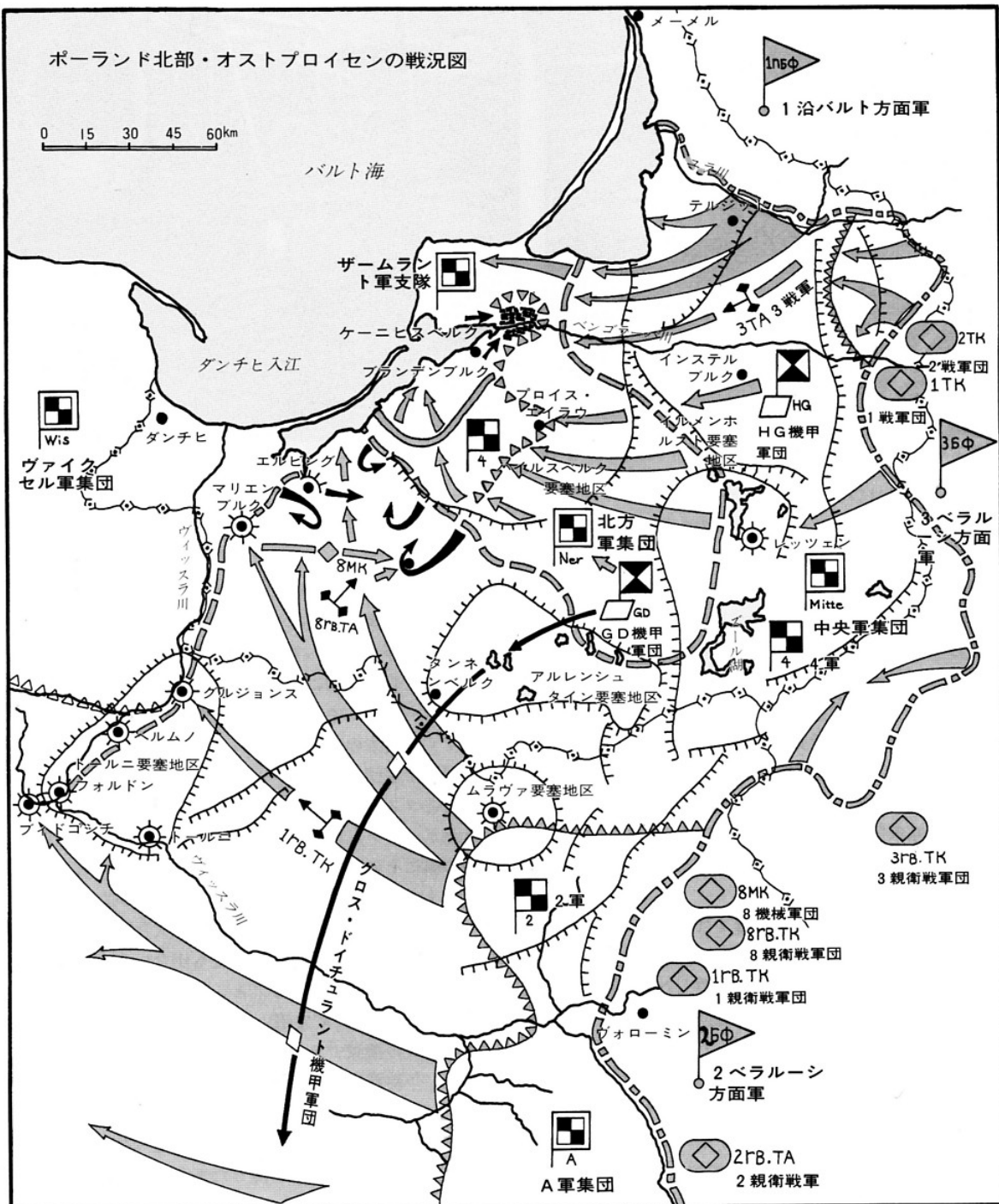
グデーリアン参謀総長も「この重大な時期にあたり、機甲軍団が列車に乗って手も足も出ないまま、数日過ごすのは致命的であります」と、ヒトラーに激しく抗議したが、「諸君の失策で招いた事態を解決するために、必要不可欠の措置である」とヒトラーも譲らず、結局この強力な予備機甲兵力は中央軍集団から取り上げられた。

「大ドイツ」機甲軍団の運命は前述した通りだが、数日間の列車移動の末、すでに間近に迫ったソ連軍砲兵の砲撃下の停車場で列車を降りたあと、すぐにソ連軍の大波の中に吞み込まれてしまい、包囲下を「生存のために」戦いながら後退するしかなかったのである。

このヒトラーの介入にはもう一つおまけがついた。西部戦線アルデンヌ地区から「東部戦線の補強のため」引き抜かれたディートリッヒSS上級大将のSS第6機甲軍が、最も危機の迫っているオーデル河前面ではなく、前年からブタベスト市と油田地帯をめぐる攻防が続いて

ポーランド北部・オストプロイセンの戦況図

0 15 30 45 60km



ドイツ軍防禦線



要塞都市



ドイツ軍の反撃と攻囲脱出

45年1月13日の戦線

45年1月18日の戦線

45年1月26日の戦線

45年2月9日の戦線

45年3月13日の戦線

いるハンガリー方面に投入されてしまったのだ。同軍は、グデーリアンをはじめ、オストプロイセン～ポーランド西部地区で苦闘するドイツ前線指揮官たちが「いまか、いまか」と待ち望んでいた有力な援軍だったのである。

グデーリアンの抗議に対してヒトラーは、「もし燃料を持たなければ貴官の戦車は動けないし飛行機も飛べない。將軍たちときた日には、まったく戦争経済についてわかっていない」と罵った。この「戦争経済」という思想のために、1943年後半いらいソ連軍にいくたびの敗北をかさねてきたのにもかかわらず……。

こうして1月16日以降、ソ連軍の大軍とオストプロイセン、ベルリンの前線でたたかうドイツ将兵の奮闘は見通しの持てないものになってしまった。

そしてこの失われた希望とうらはらに晴れ上がった空には、ソ連軍の地上襲撃機シュトルモビクやペトリアコフPe-2、ツポレフTu-2などの強力な爆撃機が無数に出現し、ドイツ兵や戦車の頭上に機関砲弾と爆弾の雨を降らせはじめたのだ。

★ソ連軍、航空機と戦車の投入で要塞地帯を突破！

天候の回復にロコソフスキー、チェルニャホフスキーの両ソ連方面軍司令官は喜んだ。第3ベラルーシ方面軍は、この機に一気にドイツ軍の第1要塞地帯を突破しようと、クリロフ大将指揮下の第5軍の戦線に「バグラチオン作戦」の功績部隊＝ブルディーヌー中将の第2親衛戦車軍団を投入、同軍団の上空に方面軍の空軍兵力（第1航空軍）のほとんどと第1沿バルト方面軍の空軍兵力の一部を出動させ、空陸一体で突破作戦を敢行させた。

ドイツ軍の強力な火点や戦車部隊の反撃は、戦車軍団司令部からの直接要請をうけたIl-10シュトルモビク襲撃機師団などが地上からの統制を受けながら正確に攻撃を行ない、粉碎した。守備していたドイツ歩兵やフォルクスシュトゥルム（国民突撃兵）は、スターリン重戦車の大口徑戦車砲の直射と空から降る砲弾、爆弾、機関砲弾の鉄火の地獄の中で壊滅していった。

ソ連軍は、戦車軍団の投入後、わずか3時間で堅固な防禦陣地帯を突破、じりじりとドイツ軍を追撃しながら前進した。

翌17日には、第5軍の右翼でスターリングラード戦とクルスク戦で名をあげた前線指揮官リュドニコフ中将が指揮するソ連第39軍が、第1戦車軍団の増援をうけてソ連第5軍の突破で動揺して後退を始めたドイツ第26軍団の追撃を開始、19日にはドイツ第9軍団が守備していたオストプロイセン戦線の北の要衝ティルジットの背後に



ソ連空軍のPe-2爆撃機部隊

出て、背後から占領の機をうかがった。

こうしてオストプロイセン領内の強力な要塞群もつぎつぎに突破口がひろげられ、ドイツ中央軍集団は個々の軍団、師団ごとにソ連軍の攻撃部隊にむしられ粉碎される恐れが出てきた。軍集団司令官のラインハルト上級大将とドイツ第4軍司令官ホスパッハ大将は、陸軍総司令部に対し、マズル湖群前面のレッツェン要塞を放棄し、湖群の後ろに後退して戦線を縮小、この地域の左右を進撃しようとしているソ連第3、第2ベラルーシ方面軍部隊の挟撃に対処したい旨の通告を行なったが、ヒトラーは「要塞を戦わずして明け渡すことは許さん」と拒否した。

しかし、ホスパッハは信念の男だった。彼は独断で第4軍のマズル湖群西側への撤退を決意し、1月22日、行動を開始して24日までにハイルスベルク要塞環状防衛陣地帯に到着して配備を迅速に完了した。

これに気がついたオストプロイセン地区ガウライター（ナチス党管区指導者）エーリッヒ・コッホはすぐさまヒトラーに直接連絡し、ヒトラーは激怒した。「これはまったくの裏切りだ！ ラインハルトとホスパッハを軍

ソ連軍のSU-76自走砲部隊





◀ドイツ軍のⅢ号突撃砲
▶オストプロイセン領内を征くソ連軍のSU-85自走砲
▼ドイツ軍の陣地帯に侵入したソ連歩兵

法会議にかけろ！ 司令部もすぐに解体してしまえ！」怒り狂ったヒトラーは、無断で後退したホスバハ大将のみならず、軍集団司令官ラインハルト上級大将まで解任してしまい、後任にクールラント地区の司令官レンドリック上級大将を呼び戻して配置した。

ドイツ第4軍の独断による後退は、「(イルメンホルスト地区を)混乱させ、秩序を乱した」とグデーリアンも非難しているが、急速に1月19日にムラーヴェ要塞地区を完全に掌握して北に向かったソ連第2ベラルーシ方面軍部隊によって南から包囲される危険が現実にあったこと、またこの撤退行動で温存された戦力が後述するオストプロイセン防衛戦のハイライトで大きな威力を発揮したことを考えれば、軍事的にはよりベターな選択だったといえよう。

★ソ連第5親衛戦車軍、一気にバルト海まで突破

ムラーヴェ要塞を突破したソ連第2ベラルーシ方面軍は、予備に温存していた戦車軍、戦車軍団、機械化軍団や騎兵軍団を投入し、バルト海へ向けた追撃戦に移った。

ソ連第2打撃軍の戦線に投入されたソ連第5親衛戦車軍は、縦列の行軍隊形のまま無秩序に退却するドイツ第2軍部隊の間を走り抜けた。1日に約40km、ときには70kmもの快進撃であった。戦意を失ったドイツ軍部隊は、ムラーヴェ要塞北方のアルレンシュタイン要塞地区でもふみとどまれず、ソ連軍の通過するにまかせてしまった。ソ連第48軍、第2打撃軍、第65軍、第70軍は先行する第5親衛戦車軍、第1親衛戦車軍団、第8親衛機械化軍団、第8親衛戦車軍団、第3親衛騎兵軍団の快速兵力のあとを追って順調に進撃した。

この光景には、まるで大戦初期のドイツ機甲軍団の電撃戦を思わせるものがあった。



実際に住時のドイツ戦車部隊もかくやという場面もあった。ソ連軍の快進撃は、ドイツ側の予測をはるかに上回るものでバルト海を背にした要塞都市エルビング市に、1月23日の夕方、突然T-34/85戦車の中隊が現れた。市電が走り、同地の戦車学校生徒が教練から帰りの行進をしている最中にあらわれたジャチェンコ親衛大尉率いるソ連第5親衛戦車軍先鋒戦車中隊は、市民の間にパニックを引き起こしながら、そのままバルト海の海岸方面まで突破してしまった。

この知らせを聞いたドイツ軍部隊は、直ちにエルビング要塞外郭陣地に配備につくありさまであった。

★ケーニヒスベルク市包囲網打破へドイツ軍果敢に反撃

1月26日、中央軍集団から改名されたドイツ北方軍集団は、ソ連第5親衛戦車軍によってドイツ本土から切り離され、東から攻撃するソ連第3ベラルーシ方面軍の7コ地上軍と2コ戦車軍団、赤旗バルト艦隊航空隊も加えた強力なソ連航空兵力によってゼムラント半島とケーニヒスベルク市、その西方のわずかな地域に押し込められていた。このままでは同市と軍港ピールラウの陥落は時



間の問題である。

ドイツ第4軍司令官、ホスパッハの後任ミュラー大將は、ソ連第5親衛戦車軍と第48軍を撃退し、ヴィッスラ河口部のドイツ第2軍前線との連絡を回復する決意を行った。そして27日夕刻、残余の6コ歩兵師団、1コ自動車化師団、1コ機甲師団をもってハイルスベルク要塞地帯の西方から出撃、ソ連第48軍の戦線に襲いかかった。この一撃にオストプロイセンの命運をかけたドイツ軍は、重砲兵、戦車の大部分を集中し、ソ連第96、第17の両狙

撃師団の狭い防衛陣地に猛攻をかけた。

第1撃は成功し、ソ連第96師団は大損害を受けて後退、第17師団は包囲下に陥った。天候の悪化がドイツ軍を助け、大敵ソ連空軍の出動はなかった。

ソ連軍防衛線を突破したパンター、ティーガー戦車を先頭にしたドイツ突破部隊は、次々に駆けつけるソ連第5親衛戦車軍のT-34中戦車と激闘を交えながら1月30日には、ドイツ第2軍が守備する要塞都市エルビングまであと10kmと迫った。

オストプロイセンにおけるドイツ軍の死闘

伊達博昭

1945年に入り、東部戦線は一段と緊迫の度合いを示し、ソ連軍は前年のバクラチオン作戦の余勢をかってドイツ本国を目指し、怒濤の進撃を行っていた。その先鋒は、南部ではハンガリー・チェコスロバキアを席卷し、北部では既に東プロイセンへ到達していた。

アメリカ・イギリス連合国との戦いにおいては、各国共にジュネーブ条約調印国であり、捕虜・負傷兵の取り扱いや戦闘行為も一応条約を遵守した形をもって行われていた。

一方ソ連との戦いにおいては、ソ連がジュネーブ条約の調印国でなかったこともあるが、ドイツの東方生存圏構想(レーベンスラウム)、スラヴ民族の徹底管理といった人種政策、そしてイデオロギー上の根深い対立という複雑多岐にわたる種々の問題が介在し、ドイツのソ連兵捕虜に対する取り扱い、占領地における支配政策等それはかつてない厳しいものであった。その結果が、民族同士の根深い対立と報復戦という様相を見せ始めた。

スターリンも、自国の内政において多様な問題抱えていたにもかかわらず、ドイツの政策失敗を民族の復讐という共通スローガンの下に、巧みな大衆操作を行ない、パルチザン抗争を組織し、各軍司令官達や政治将校も第一線將兵達に、民族の復讐という教育を周知徹底した。

結果するところ、東部戦線では、ドイツ・ソ連双方共に戦いは凄惨を極め、とくにドイツ軍將兵の間では、ソ連軍捕虜となったものの末路が知られるにつれて、かつてない程の危機感に見舞われた。

ソ連軍のドイツ領占領政策も、凄まじい略奪の限りを

尽くす形となり、そのことが一層ドイツ軍の結束と覚悟を強めることになった。バルチック海岸沿いや東プロイセンでは、まさにそうした危機感が如実に表れた国土防衛戦の様相を見せており、そこには将校・下士官・兵士の階級いかんを問わず、全軍人と地域住民が一体となった民族対民族の激突となった。

この頃のドイツ軍の歩兵の平均年齢は約40歳という状況であるにもかかわらず、個々の部隊においては、自分達の陣地が破られれば、そのままドイツ民族の滅亡に繋がることを意味するものとして、十分に理解されており、まさに最後の一つの陣地が壊滅するまで、随所で頑強な徹底抗戦と超人的な戦闘努力が行なわれていた。

彼らは、民族の生存をかけて義務と忠誠の下にその限界まで立派に戦ったのである。

陸軍がこのように英雄的な戦いを行っている状況下で、海軍もまたデーニッツの指揮の下に、使用できる全艦艇を動員し、ダンケルクの比ではない規模をもって、荒海のバルト海を避難住民を満載し、ドイツ本国へ無事退避させることに成功した。その数は約200万人。

まさに、ドイツ軍人の歴史と伝統の真髓とともいうべきものが、如何なく発揮させたのである。

つまり、陸続きの大陸国家間の戦争が民族全体を巻き込んだ場合の運命というものを、永い歴史の中で深い教訓として刻み込まれていたのであり、そのことが、日本の満州における関東軍の無能な戦い振りと決定的に異なる結果をもたらしたのである。



◀激戦の末ケーニヒスベルク市内に突入するソ連軍
▼ケーニヒスベルク陥落までドイツ軍将兵は、決死の抵抗を続けた

事態を重視したソ連第2ベラルーシ方面軍司令官ロコソフスキーは、ドイツ軍突破口の南に位置する第30、第50軍にドイツ軍側面への攻撃を命ずるとともに、方面軍予備として温存していた強力な対戦車砲旅団5コおよび数コ師団を、ドイツ軍先鋒とエルピング市の間の地区の攻撃軍側面に集中させた。新鋭の100mm対戦車砲をはじめ、ふんだんに対戦車砲と対戦車自走砲をもった独立対戦車旅団は、ドイツ軍戦車部隊に大きな損害を与えた。

エルピング市方面からのあまり強力でないドイツ第2軍の攻撃も撃退され、1月30日いっぱいドイツ第4軍の反撃は阻止されてしまった。これ以降、オストプロイセンのドイツ軍部隊は、陸づたいではドイツ本土との連絡を回復することはなかった。

★オストプロイセン地区の奮戦がソ連の計画を遅らす

この頃、ケーニヒスベルク市は5コ軍による重囲の中、激闘を続けていた。1月29日には市西方のブランデンブルクをソ連第11親衛軍に占領され、一時は市と軍主力が分断されたが、ヘルマン・ゲーリンク降下機甲擲弾兵師団と残余の戦車部隊の反撃ですぐに奪回された。その一方で市北方のゼムラント地区は、ソ連第39、第43軍の猛攻で分断され、戦線は市の外郭に迫った。

しかし、ケーニヒスベルクは4月26日まで陥落しなかった。堅固な陣地帯と「ポリシェビキの復讐」に怯えた国民突撃兵、ドイツ将兵の決死の抵抗が、ソ連歩兵部隊にも多大の損害を与えつづけたのである。

2月初め、ソ連第1ベラルーシ方面軍はベルリン東方わずか60kmのオーデル河にいくつかの橋頭堡を確保、戦争継続に唯一の頼みだったシュレジエン工業地帯もソ連第1ウクライナ方面軍に完全に制圧された。ソ連軍は、前年にもまして装備を充実させており、指揮官の技量の習熟という点でも完全に「電撃戦」の教師＝ドイツ軍を



追い越したのである。

しかしここで一旦、ソ連軍は前進を停止しなくてはならなかった。たしかに両方面軍は、最終作戦出撃予定線（ビドゴスチ～ポズナニ～プレスラウ）よりも西方に進出したが、予定された「2月中にベルリンを占領する」作戦は開始できなかった。オストプロイセン地区での予想外のドイツ軍の奮闘と、その間のボンメルン地区での新たなドイツ軍の集結（ヴァイクセル軍集団の結成一司令官はSS長官ヒムラー）のため、第1ベラルーシ方面軍の北方側面が150km以上も手薄になったためである。

戦争が長引いたことはドイツ国民にとって決して幸いしたことでなかった。日本における沖縄での攻防戦がそうであるように、ドイツにとってはオストプロイセンでの戦いが、本土での決戦の先行きを示すものであった。民間人は、混乱した行政と軍当局により「疎開禁止」や「即時疎開」などの矛盾した命令を繰り返され、結局軍にかえりみられずに、「復讐の鬼」と化したソ連軍の中に無防備のまま取り残された人々も少なくなかった。

結局、ヒトラーら指導部は、「西側連合国とポリシェビキの劇的な激突」を夢見たまま、ベルリンでの破滅まで国民、兵士を業火の中に追い込むことをやめなかったのである。